

# 京芸通信

*Kyogei Tsushin*

25

特集

二十年のあゆみ 日本伝統音楽研究センター 創設20周年

半年間の出来事

京芸トピックス 2019.7-2020.1

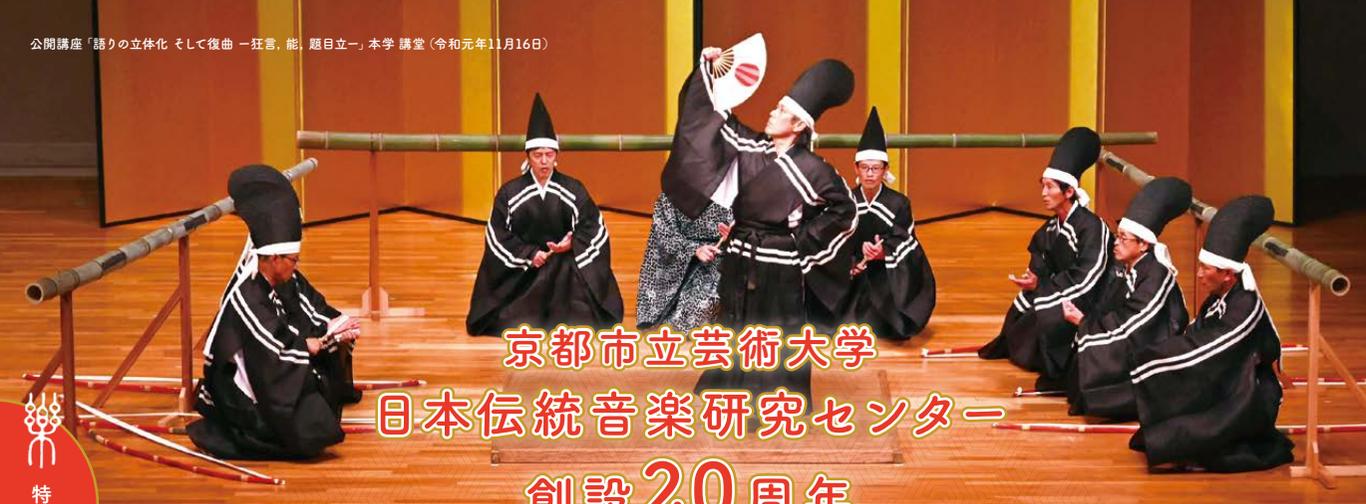
教員によるリレーコラム

向山佳絵子 准教授・チェロ奏者

修了生インタビュー

石塚源太さん 漆作家





# 京都市立芸術大学 日本伝統音楽研究センター 創設20周年

## 二十年のあゆみ

日本伝統音楽研究センター 所長  
渡辺信一郎



日本伝統音楽研究センター(でんおん、伝音センター)は、本学の新研究棟の6階から8階を占めています。新研究棟入口の定礎には、「平成十二年二月」と刻んであります。同年4月に発足した伝音センターは、新研究棟とともに20年の歴史を歩んできました。

発足からの10年については、当時の久保田敏子所長が「日本伝統音楽研究センター設立十周年を迎えて」と題し、設立以来10年のあゆみをふりかえっています(『京都市立芸術大学創立130周年記念 十年のあゆみ』京都市立芸術大学、2010年7月)。

久保田所長は、前期10年のあゆみをふたつにまとめています。ひとつは、専任研究員・特別研究員や非常勤研究員による個人研究、ならびに学際的な共同研究を組織する研究体制が確立したことです。ふたつめは、毎月貴重な音源を市民に紹介する「伝音セミナー」、前期・後期に2講座ずつ開催する専門的な「連続講座」、毎年数回開催する「公開講座」など、各種講座の開催、ならびに毎年1回の『所報』発行、伝音センター独自のウェブサイトを開設して情報・成

果を発信する体制が軌道に乗ったことです。その結果、伝統音楽・芸能に特化した、貴重な資料の宝庫をもつ研究のメッカとして世界的にも注目されるようになった、とむすんでいます。

最近の10年間は、前期10年の研究体制、成果・情報発信の体制を維持し、さらに充実してきたことはいまでもありません。ここでは、それらをつまえたこの10年の活動の特徴点について記しておきます。これもふたつあります。

ひとつは、国際的な活動・交流が進展したことです。前期10年で世界的に注目されるようになった結果、外国からの長期・短期の滞在研究者や一般人・学生の訪問が増えました。

さらにこの10年で国内外の研究機関と協定をむすんで研究交流をすすめることが多くなりました。現在、国内では国際日本文化研究センター、海外ではアメリカのスタンフォード大学音楽学部、スイスのジュネーブ高等音楽学院、中国の山東大学芸術学院などと協定をむすんで共同研究や講演会・コンサートの開催など、さまざまな活動を行っています。

今後は、人の交流だけでなく、伝音センターが所有する貴重な資料やアーカイブが国内外から簡単にアクセスできる環境づくりも必要になっています。

ふたつめは、2013年に大学院音楽研究科修士課程に日本音楽研究専攻(1学年定員3名)を設置したことです。その結果、専任教員と

非常勤講師(特別研究員)が学生教育にも携わるようになりました。

日本音楽研究専攻は、教育内容を基礎領域・特殊領域・応用領域の3つの領域に区分し、独自の段階的な学生教育をおこなっています。とくに史資料の解釈、フィールドワーク、実技など、複数のアプローチを通じて対象をより深く理解すること、伝音セミナーなど市民講座等の実践活動を通じて、広く社会に対して研究内容を提示できるようになることを重視しています。これまで、8人の学生が修士論文を提出して学位を取得し、社会に出て活躍しています。

学生の存在は、伝音センターの活動に活気をもたらします。近年は、国際交流の進展にともなって、外国人留学生とくに台湾・中国からの留学生が増加し、にぎやかになってきました。今後この傾向が進めば、国際化に対応できるようなカリキュラムの編成や受入体制が必要になるかもしれません。

3年後には、この20年のあゆみをもとにした沓掛の新研究棟をはなれて、伝音センターは新キャンパスに移転します。そのさきをみすえて、昨年11月に開催した第55回公開講座「語りの立体化 そして復曲 一狂言、能、題目立一」を皮切りに、伝音センターは今年、さまざまなかたちで20周年の記念事業をすすめています。その内容は適宜お知らせしますので、伝音センターの将来とともにご期待ください。

## 伝音センターの出版物

紀要・所報・研究報告書等の学術出版物や、公開講座の様子が収録されたDVD等を制作し、公開講座等の成果内容を、国内外の研究者および市民との情報共有と交流に役立てています。



## 伝音センター 公式ウェブサイト

<https://rcjtm.kcua.ac.jp>



公開講座等の最新イベント情報のほか、論文や動画等のアーカイブが閲覧いただけます。

## 伝音センターの主な活動 ① 全国的・国際的レベルでの研究センターとして

### 収集と保存

SP・LPレコード、オープンリールテープ等の無形文化財に収録されている音源をデジタル化し、公開活動を進めています。



### 調査と研究

年間で計50名ほどの共同研究員や演奏家が招聘され、様々なジャンル・方法の調査研究が要請されています。



### 公開と啓蒙

文献資料を収蔵する「資料室」では、学芸員と司書が日々地道な作業を続け、学術的研究の啓蒙普及と公開に貢献しています。



## 伝音センターの主な活動 ② 日本伝統音楽に対する「知」と「魅力」を共有するために

### 1 公開講座

日本の伝統音楽及びその研究活動を伝えるために、毎回、学外から演奏家や研究者などの豪華ゲストを招き、年3回程度開催しています。



公開講座「平安から唐へ 縁でたどるいにしへの韻-琵琶、箏の古譜による琴曲の再現-」ウィングス京都 (2019年3月23日)

### 2 伝音セミナー

SPレコード等に残された音源を紹介する無料講座です。日本の伝統音楽に触れるのは初めてという方にも気軽に受講していただけます。



伝音セミナー「能(羽衣)の楽譜」 本学 伝音センター (2019年12月5日)

### 3 でんおん連続講座

専門的なテーマを扱う講座です。演奏等の実演を交えた説明と、歴史的資料、口伝書、楽譜等の演奏資料を読み進め、理解を深めます。



でんおん連続講座「常盤津師実践入門【全7回】」 本学 伝音センター (2019年4~7月)



公開講座「学校教育に能を! (羽衣)」 京都観世会館 (2018年12月25日)



伝音セミナー「人情と刃傷 一音で知る「股旅もの」」 本学 伝音センター (2019年1月10日)



でんおん連続講座「カラダで検証する雅楽研究」 本学 大学会館 (2019年3月30日)

## 伝音センターの施設

### 図書室

収蔵資料数は約4万1千点。本学の教職員、学生のほか、調査研究のために必要な方も閲覧・視聴いただけます。



### 展覧ギャラリー

年に数回、特定の研究テーマで文献・楽譜・パネル等の展示を行っています。



# 京芸トピックス

2019.7-2020.1  
半年間の出来事

## 京都銀行 「美術研究支援制度」

学生作品をご購入いただきました

芸術家支援と優れた文化・芸術の創造・振興に寄与することを目的に創設された、京都銀行の「美術研究支援制度」において、本学の学生が制作した作品を8点ご購入いただきました。今回を含めると、これまで合計149点の作品をご購入いただいております。

2019年12月11日に目録の贈呈式があり、京都銀行から土井頭取、岩橋常務、羽瀨部長が、本学からは赤松学長等が出席し、土井頭取から今年度の対象者に目録が手渡されました。

今回ご購入いただいた作品は、2020年1月14日から2月21日までの間、同行本店営業部1階ロビーで展示されます。

購入作品の内訳：日本画2点、油画2点、版画2点、漆工1点、染織1点



## さらなる実践的な学びへ 京都市交響楽団と協定を締結

将来の音楽芸術文化の担い手を育成するため、日本で唯一の自治体直営オーケストラとして創設された京都市交響楽団（京都市音楽芸術文化振興財団理事長）と2019年8月6日に連携協定を締結しました。京都市交響楽団が、本学の学生に実践的な学びの場を提供するなど、未来の優れた音楽家を育成し、音楽芸術文化の発展を目指します。9月22日には、京都市交響楽団の第638回定期演奏会に、本学大学院生の米井遥香さんが出演しました。

米井遥香さん  
(器楽専攻修士2回生/ヴァイオリン)  
京響の定期演奏会で感じた素晴らしい音楽を、今後の自分の糧にしていきたいです。貴重な機会をありがとうございました！



## 祇園祭「鷹山」の復興を目指して 「音頭取り」、「車方」の衣装等をデザイン

2019年の祇園祭後祭において約200年ぶりに唐櫃巡行で復活した「鷹山」。その衣装等のデザインに本学美術学部・大学院美術研究科修士課程の学生が2017年度から取り組んでいます。本学の専攻横断型授業《テーマ演習》「祇園祭の鷹山の復興デザイン計画」履修生19名が、2019年8月1日、鷹山保存会に、「音頭取り」と「車方」の衣装と「ちまきのし紙」のデザインを提案しました。「音頭取り」と「ちまきのし紙」は、堀切美希さんの作品、「車方」の衣装は、永井美帆さんの作品が選ばれました。



永井美帆さん  
(日本画専攻3回生)  
日本が誇る伝統文化の復興プロジェクトに携わることができて嬉しいです！



堀切美希さん  
(染織専攻3回生)  
5歳から始めた書道で、祭の熱気とタカの力強さを表現しました！

## バロック・オペラで交流 ウィーン国立音楽大学との 交流演奏会を開催

2019年11月21日、日本・オーストリア国交樹立150周年記念として、ウィーン国立音楽大学との交流演奏会を、京都文化博物館別館ホールで開催しました。本学客員教授であるインゴマー・ライナー氏の指揮・監督のもと、細川ガラシャを題材にしたバロック・オペラ「勇敢な婦人」を上演しました。ウィーン国立音楽大学とは2008年に交流協定を締結し、双方の教員による演奏会や、学生の交換留学など交流を続けています。



佐々木涼輔さん  
(声楽専攻修士1回生)  
節目の年に、ウィーン国立音楽大学の方と同じ舞台上に立てたことを誇りに思います。彼らから受けた刺激を糧に、より良い演奏会を作り上げられるよう更に精進します。



## 堀場厚氏 特別講義 ON THE TERRACE 京都芸大生に期待すること ～社会基盤としての芸術～



赤松学長が掲げるテラス構想の取組の一つとして、2019年12月18日、堀場製作所の堀場厚会長をお迎えし特別講義を開講しました。芸術とは異なるグローバル企業のトップ、京都経済界のリーダーである堀場会長の講義は、未来の芸術家を目指す学生の今後の創作活動、演奏活動、さらには人生の一助となる貴重な時間となりました。堀場製作所の社是は、「おもしろおかしく」。また、①誰も思いつかないことをやりたい、②技を究めたい、③自分の仕事や会社を誰かに伝えたい、④人や地球の役に立ちたい、⑤世界を舞台に仕事をし



たいという「5つのおもしろい」を掲げられています。これらの思いは、未来の芸術家をを目指す学生も同じであろうと、意外な共通点を発見することができました。

## 沼尻竜典氏の指揮で 壮大な演奏と合唱を披露

第162回定期演奏会を開催

2019年12月9日、京都コンサートホールにて、第162回定期演奏会を開催しました。学生がより多くの指揮者に触れる機会を持てるよう、今回は、びわ湖ホール芸術監督を務める沼尻竜典氏を初めて指揮に迎えました。また、日本・オーストリア国交樹立150周年にちなみ、ウィーンとの縁の深い作曲家を取り上げました。ブラームス「運命の歌」では、声楽専攻生だけでなく合唱の授業を受講している他専攻の学生も参加し、壮大な合唱を披露しました。

### PROGRAM

- L.v.ベートーヴェン 劇音楽「エグモント」序曲 作品84
- J.ブラームス 「運命の歌」作品54
- G.マーラー 交響曲第1番 二長調「巨人」



## 陸上部、活躍中！

### 2020ユーススカイランニング 世界選手権の日本代表に内定

陸上部は、1～4回生の男女14名が、創作活動の合間を縫って、練習に取り組み、大会にも出場しています。2019年11月23日に開催された「びわ湖パレイスカイラン パーティカル（打見山頂まで直登する駆け登りレース）」において、陸上部の若林綾さんが女子総合8位、23歳以下ユース2位となり、2020年夏にイタリアで開催される「2020ユーススカイランニング世界選手権」の日本代表に内定しました。



若林綾さん(漆工専攻2回生)  
トップとの力の差を見せつけられ、もっと強くなりたいとメラメラワクワクしています。創作でも練習でも焦らず確実に力をつけて、世界のトップを目指します！！



本学ウェブサイトでは、本学の最新情報やイベント情報を公開中！  
<https://www.kcua.ac.jp/>

# Relay column

## 教員によるリレーコラム



チェロという楽器は、重さもさることながら、なんといつても大きくて厄介だ。時には捨てて帰りたいくなることもある。そんな楽器が、クラシック音楽を聴くのが好きなお父と、チェロを弾いていた母のもとに生まれた私には、珍しい存在だった。9歳で始めて、半年程でジュニア・フィルハーモニック・オーケストラに入団。個人練習が嫌いなのは当時から現在まで変わることはないが、とにかくオーケストラでみんなと弾くのは楽しかった。おかげで今もチェロを弾き続けられていると思っています。

オーケストラの次は室内楽。中学、高校時代にその魅力にとりつかれ、高校では毎月のように行われていた室内楽のコンサートでいつも弾いていた気がする。その頃、とあるコンサートで一緒にさせていただいたのが、ヴァイオリンの豊嶋先生(本学弦楽専攻教授)！ちょうど新日本フィルのコンサートマスターに就任された時期だと思う。こんなに楽しく、心地よく弾かせてもらえるものかと感動し、神のように崇めていたのを覚えている。それから数十年、どれだけの曲を共演してきただろう…。

### 教え子との共演を夢見て

### 向山佳絵子

弦楽専攻准教授・チェロ奏者



そして、そんな長い付き合い合いの豊嶋先生からいただいたお電話をきっかけに、今度は京都芸大で一緒にすることになったのだ。もうすぐ着任して2年。これまで大学の非常勤講師として教えたことはあっても、それ以外の業務は未知の世界。不安しかない状態で飛び込んでしまったが、周りの先生方に教えていただいたきながらとにかく必死でこなそうと努力している。

京都市大は少人数なので、専攻、学年の枠を超えて皆仲が良い印象だ。管弦打楽器はオーケストラでもいつも一緒、積極的な意見交換も行われているようだし、そんなことが息の合った演奏を可能にしているのではないだろうか。一方で、関西には音楽大学は多くなく、他大学との交流が東京と比べると少ないのは残念。学生には、講習会や交流演奏会等、いろんな演奏家、指導者、学生との出会いを勧めるとともに、チェロに関しては私が東京のチェリストや学生たちをある程度把握しているため、彼らの動向などを伝えるよう努めている。やはり同世代の学生との交流は一番の刺激になると思う。私がドイツのリューベックに留学したときに感じたことだ。演奏技術、練習方法、楽曲に対する考え、取り組み方など、新たな視点に気づくだけでなく、お互いが切磋琢磨し、確実にレベルアップにつながる。

京都芸大では、学部をも越えて美術からも影響を受けることができる。こんな近くにいるのだ、貴重なチャンスだと思う。

さて、チェロは大きくて厄介で、

弾くのも厄介だが、その魅力はさらに大きい！ソロ、室内楽、オーケストラはもちろん、チェロだけのアンサンブルも楽しい。とはいえ、同一楽器のみのアンサンブルは、音域、音色が重なるため、バランスをとるのがより難しく、自己主張が強すぎるし成り立たない。お互いを理解し、尊重し、思いやるのが重要になる。学生たちには夏のチェロ試演会で取り組まれているが、そこで得たことは、他の楽器との室内楽にも活かせると思う。

チェリストに室内楽は欠かせない。共演者に、また一緒に弾きたいと思われたいチェリストをたくさん育てられたら本望だ。そして、そんな教え子と近い将来同じステージに立てたらと願っている。



沖縄ムービーミュージックキャンプにて(1987年12月)豊嶋先生(左端)、向山(右から2人目)



第1回宮崎国際音楽祭にて(1996年3月)豊嶋先生(左から2人目)、向山(右から2人目)

### Profile 向山佳絵子 むこうま かねこ

1993年東京藝術大学音楽学部卒業。1990年ドイツ・リューベック音楽大学に留学。これまでに、松波恵子、堀江泰氏、レーヌ・フラシヨ、毛利伯郎、岩崎洗、ダヴィッド・ゲリンガスの各氏に師事。東京藝術大学、武蔵野音楽大学の非常勤講師、NHK交響楽団首席奏者を歴任。NHK交響楽団「若い芽のコンサート」、カザルスホール「向山佳絵子とチェロの世界」シリーズ出演をはじめ、NHK-FM「おしゃべりクラシック」のパーソナリティや、J Tアートホール室内楽シリーズのプランナーも務め、1998年からはハレー・ストリング・カルテットにも加わった。ソニーより「パッサリ無伴奏チェロ組曲全曲」ほか5枚のCDが発売されており、収録曲はNHKスペシャルやドラマのテーマ曲、TVCM曲などに使用されている。カメラータ・トウキョウからは池辺晋一郎と三善見のチェロ協奏曲のCDもそれぞれ発売されているほか、日本コロムビア、日本アコースティックレコーズから室内楽のCDも発売されている。



— 受賞おめでとうございます。グランプリを受賞された時の感想をお聞かせください。

プレゼンターに名前を呼ばれた時は、とにかく驚きました。事前に発表されたファイナリスト29名に投入ただけでほっとしていたぐらいですから。授賞式当日は、ファイナリストが会場に招待され、まず特別賞2名が発表されました。そこに入れなかったのが残念に思っていたところ、「Winner、石塚源太」と呼ばれ、舞台上に促されました。その後のことは、あまりの驚きと緊張で詳しくは覚えていません。

今回受賞したことで、今まで自分の活動を見てくださっていた方々に一つの結果を報告できたことがよかったです。世界でも有数の注目度の高いコンペだったので、多くの人に作品と名前を知ってもらえたのは、素直にうれしいです。

— 受賞作品「感触の表裏 #11」は何をイメージして制作されたのですか？

スーパーに売られているネットに入ったみ



かんを見たのがきっかけですね。漆の持っている「つや」を活かすにはこのフォルムだとピンとききました。実際にみかんのネットをホームセンターで買ってきてその中に、みかんの代わりに発泡スチロールの球を入れ、試作を作ってみました。球が生み出す表面の張りに漆特有の「つや」が見る角度により様々な表情を見せ、今までにない独特な作品に仕上がりが衝撃を受けたことを覚えています。当初直径3cmほどの球でしたが、最近では直径40cmほどの特注の球を使用し、高さ150cmを超える大型作品にも挑戦しています。

— いつ頃からアーティストを目指していたのですか？

子どもの頃からモノを作ることは好きでした。高校2年生の終わりには京都芸大への進学を目指し、入学後はひたすら制作に励んでいました。京都芸大は小規模な大学なので縦、横のつながりがとても強く、よく彫刻や油画など他専攻の友達に自分が制作した作品の意見を求めたり、先輩の作品を観に展覧会にも足を運んでいました。今考えるとそのような環境の中で自分の作るべき作品を模索していたのだと思います。

— 今後の目標を教えてください。

ロンドンでの個展は2018年に経験できたので、5年以内つまりは40代前半までに、次はアメリカ西海岸で個展をしたいと思っています。カリフォルニアでのクラフト、アート、デザインの成り立ちに興味があり、日本の工芸

ロエベファンデーションクラフトプライズ2019 グランプリ受賞作品  
《感触の表裏 #11》2018  
漆、発泡スチロール球、2wayトリコト、乾漆技法  
84×67×66(cm)  
Photography Takeru Koroda

Loewe Foundation Craft Prize 2019  
グランプリ受賞

## 石塚源太さん

漆作家・大学大学院修士課程修了



個展 'Membrane' 2018 Courtesy, Erskine, Hall & Coe.  
Photography Andy Stagg

のシーンに起こったことや自分の制作を相対化できないかと思っています。そこで自分の作品のプレゼンテーションができればというのが今後の目標です。そして、10年以内には最新の現代アートが集まるニューヨークで個展をしたいですね。

profile: 石塚 源太 Ishizuka Genta

1982 京都府生まれ  
2006 京都市立芸術大学工芸科漆工専攻卒業  
Royal Collage of Art (イギリス・ロンドン) 交換留学  
2008 京都市立芸術大学大学院美術研究科修士課程  
工芸専攻(漆工) 修了  
2019 京都市芸術新人賞受賞

ウェブサイト <https://gentaishizuka.com>



石塚源太《Stellar Dance》2018 修了生インタビュー（裏面）をご覧ください。

漆、カッターの刃、縫い針、釣り針、ホチキス、合板、その他  
120×120×3.5 (cm)  
Photography Takeru Koroda

退任教員のお知らせ

2019年度末に6名の教員が退任します。

横田学教授(芸術学)  
浅野均教授(日本画)  
大野俊明特任教授(日本画)  
中ハンクシゲ教授(彫刻)  
三橋遵教授(染織)  
山村麻子特任講師(教職課程)

退任記念展@KCUA

-2/15~3/1  
横田学教授  
-3/7~3/22  
浅野均教授  
大野俊明特任教授  
中ハンクシゲ教授  
三橋遵教授

ご支援ありがとうございました

2019年下半年「未来の芸術家支援 のれん百人衆」にご寄付いただいた方々をご紹介します。\*公表に同意いただいた方(敬称略,五十音順)

株式会社一澤信三郎帆布	株式会社トーセ
イントロン株式会社	西陣織工業組合
株式会社永楽屋	服部重彦
天ぶら圓堂	株式会社ハトヤ観光
京都信用金庫	株式会社フラットエージェンシー
株式会社祇園辻利	株式会社細尾
株式会社茶寮都路里	渡辺孝史